

学 位 請 求 論 文 要 旨

ネットニュース翻訳におけるプロセス規範の研究
—人民網日本語版に関する情報伝達の構造分析—

2019年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

張 南薰

要 旨

情報のグローバル化が急テンポで広がっている中、メディア翻訳が異文化間のコミュニケーションを成し遂げるための橋掛けとしてかつてない重役を果たしつつある。だが、メディアのあり方が、ペーパー・メディアからネット・メディアへ徐々に傾斜しているだけでなく、情報交流も新たな方向を呈しているのにもかかわらず、ネットニュースの翻訳に関する研究はいまだにその現状および実践のニーズに追い付いていないようである。

本論文は、中国の対外メディア機構である人民網日本語版の対訳記事を対象に、情報構造体としてのテキスト全体にわたる情動的シフトを分析することで、ネットニュースの翻訳における「プロセス規範」を確立することが目標である。その構成は次のとおりである。

まず第2章では、今までの翻訳研究の視点がいかに翻訳プロセスの軸に沿って、「ST 傾斜時代」・「ST と TT の等価時代」・「TT 傾斜時代」・「社会文化的研究」・「学際的研究の打開」という5つのパラダイムを経てきたかを概説する。このように理論間の因縁関係を見出すことによって、各理論の間には、優劣の差がなく、翻訳行為という全体像の中においてそれぞれ関心を寄せる点が異なるだけだと結論づけられる。これらの関心点を、ある個別的な翻訳行為に対して、適切な視点で照射すれば、該当する翻訳分野の独特な全体像を明らかにすることができる。と述べる。

第3章は、いかにして各理論の優れた知見を、ネットニュースの翻訳という分野に応用するかを論述する部分である。これまで、中国国内のニュース翻訳に関する先行研究をふまえて、ニュース翻訳の理論的研究はミクロ的な翻訳技法の同定から、文化的要因の探求へと、視座が一層高まっていることが明らかになった。しかし、多くの研究は TC に偏っているほか、文化的理論と翻訳技法の間における関連性について客観的考察が欠如している。そして、研究パターンも言語形式を対象とする論述にとどまっている。この現状をふまえて、SC と TC の相互関係、およびニュース翻訳の全体像を俯瞰できる異文化間コミュニケーション的視座と、その内核である情報伝達的視点を取り込む必要性を述べる。一方、研究方法としては、情報理論の基礎的原理に従い、情報とコードのつながり方・情報の冗長性・情報価値という3つのテーマをめぐって、テキストの量的測定と質的分析を行う手順を説明する。また、研究対象については、人民網日本語版が読者層、翻訳者の素質、対訳記事の掲載方式、およびジャンルの設定などにおけるメリットを分析する。このように、異文化間コミュニケーション的視座に立ち、情報伝達の視点を導入することで、バリエーション豊かな翻訳技法を一括して捉えうる学際的な研究枠組みを構築する。

それに次ぐ第4章、第5章と第6章では、チャストマンの「翻訳規範」の概念を部分的に導入し、人民網日本語版を対象に、中国のメディア翻訳の「期待規範」ともいえる“外宣三貼近原則”（三つの密着原則）に則り、いかなる「責任規範」・「コミュニケーション規範」・「関係規範」が実現されているかを論じてゆく。

まず第4章では、固有名詞の翻訳に主眼をおき、ネットニュース翻訳の「責任規範」のあり方を考察する。ニュース翻訳では、客観事実が不変項目であるが、客観事実の基盤を成す固有名詞の翻訳が様々な変容を見せている。その原因を探求するために、まず大量な実例分析をふまえ、固有名詞の情報内容とコード形式のつながり方のずれを記述分析し、翻訳者がいかに日本人読者の受容習慣に従い、TTの内部において、固有名詞の情報構造を調整するかを探る。次に、異なるジャンルのTTの間にみられる情報内容とコード形式のつながり方の変容を対象に、ジャンル別による翻訳技法の分岐が、異なる報道動機につながることを実証する。このようなTT内部とTT間の二つの方向で展開された分析を通じて、固有名詞の翻訳で顕在化する「責任規範」のあり方に迫る。

第5章では、冗長さの変化を対象に、ネットニュース翻訳の「コミュニケーション規範」の具体像を明らかにする。翻訳は、2段階にわたる異文化間コミュニケーションとして、情報伝達の環境の変化に伴い、ノイズの干渉が避けられないものとなる。それに対抗しながら、有効な情報の伝達を図るために、冗長さの調整が必要とされる。この章ではまず対訳記事100件を対象に、STとTTのコード形式の冗長さに対する量的分析を行う。その結果、STの冗長度がTTの冗長さ変化率に影響力を持つことが分かった。STがいかに翻訳者の冗長さの調整に影響を及ぼすかを実証するために、STの文化、メディア的特徴に基づき、翻訳行為の取り囲まれる文化的コンテクストとメディア的コンテクストのそれぞれTTに対する影響力、および相互間の関連性を把握する。また、情報がコード形式と情報内容の両面を具えるという特質をふまえ、情報内容に対する質的分析を行う。それを通じて、メディア的コンテクストと様々な翻訳技法の内核である情報統合行為との関連性を考察する。その結果、冗長さの調整は、文化からメディアへ、そしてそこからさらに情報統合へと、展開される動的な連鎖メカニズムであると主張する。なお、こういう情動的仕組みの発見をきっかけに、ネットニュース翻訳の「コミュニケーション規範」にアプローチする。

第6章では、TTの語種分布状況を対象に、量的・質的分析を実施することによって、ネットニュース翻訳の「関係規範」を探る。日本語の語彙体系には、語種による情報価値の分業がある。こうした理論的考察に基づき、対訳記事100件のTTにおける語種分布状況を量的に測定し、そのデータをもとに散布図を作成する。それによって、TTにおける和語・漢語・外来語・機能語のそれぞれが占める割合について傾向性を見出す。こうした翻訳上の語種選択行為をもたらすST自体の要因を究明するために、STを文化・ジャンル・文体という3つの変数に分類し、それぞれTTの語種分布状況と相関性のt検定を行う。その結果、STの文体の影響力が最も顕著で、それに次ぐのはジャンルであることが分かった。さらに、典型的な実例に対する質的研究を通して、中国語STの文体・ジャンルの情報価値が日本語のTTにおいて語彙レベルで具現されている、いわゆる「関係規範」を描き上げる。

最後に第7章として、ネットニュースの翻訳における「プロセス規範」について、典型的な実例を取り上げて比較分析することによって、その応用性を検証しつつ、今後の展望

について述べる。

以上のように、情報伝達の視点を導入することによって、マクロ的な情報伝達型の異文化間コミュニケーションの視座と、情動的シフトが内核であるミクロ的な翻訳行為の間を、架橋する学際的な研究体系を構築してゆく可能性を展望するのが本論文の趣旨で、その貢献性は以下のようにまとめることができる。

1. ネットニュースの中日翻訳における固有名詞の重要度の発見。固有名詞はコード形式と情報内容の対応関係が固定するため、翻訳の枠外と扱われがちであるが、ニュース記事で報道される情報実体の客観的・効果的な再現の成否につながる。報道機構の要請と受容者のニーズを取り持つために、翻訳者は記事内部で見出し・リード・本文という順位で固有名詞の語用論的情報、意味論的情報、統語論的情報をそれぞれ取り立てるが、ジャンルごとに、コード形式と情報内容のつながり方を変容することで、異なる領域の特色を再現する。これはまさに、翻訳者の責任と立場を示す所在であり、忠実な直訳から削除にいたるまでの幅広い翻訳上の変容を捉える根拠でもある。

2. ネットニュースの中日翻訳を取り囲む諸要素の重要度の順位付け。ネットメディアはペーパーメディアと比べ、大量かつ迅速に伝達することで、優位を占めている。だが、文化的ノイズの干渉にさらされながら、大量な情報を限られた時間で、効果的に伝達するには、冗長な情報の付加・削減が不可欠となる。本論文では、冗長度の考察を手がかりに、ネットニュースの翻訳で一般的に見られる補充訳と削除訳、異質化戦略と受容化戦略の分岐をもたらす要因、およびその要因間の力関係を見出した。機能主義的翻訳理論の創設者、Hans J. Vermeer の指摘されたように、翻訳を左右する諸要因の重要度を判定するための理論的根拠付けが、翻訳学の目下の緊急課題である。冗長度の調整を軸とする、文化からメディア、そして情報統合に至るまでの連鎖作用の発見をきっかけに、ネットニュースの翻訳に影響する各要因のランク付けが実現した。

3. ネットニュースの中日翻訳における ST と TT の情報価値上の関係構築。ネットニュース翻訳の TT は単なる翻訳の産物だけでなく、情報商品として、その情報価値の追求が終極的な目標といえる。本論文では、混種語である日本語の語種別による情報価値の体系を浮き彫りにしたうえで、TT に内在される情報価値のあり方を、語種分布状況と関連付けた。また、測定された ST と TT の情報価値上の対応関係に基づき、統計的分析を行うことで、TT の語種分布状況の多様化を来す ST の文体・ジャンル上の要因に迫った。このような ST と TT の情報価値上の関連付けは、翻訳者の語種選択、文型調整を含む一連の個人的な行動に規範を提供するだけでなく、翻訳評価などの応用分野にも柔軟な基準を与えることが期待できよう。

以上より本研究が目指すところはネットニュースの翻訳という個別的分野に適用しうる学際的な研究枠組みの提示であり、もちろんその学際化の幅をさらに広げていく可能性は否めない。それは今後の課題に譲るが、このような試みによって得た規範的なものは確かに理論と実践の絆を一層強めることに意義が大きいと述べたい。